

## 実践ノート

## 領域「表現」と図画工作科を結ぶ幼小連携の観点

## — 教科書分析に基づく工作教材の実践から —

小室 明久<sup>1</sup>, 小島 菜緒子<sup>2</sup>, 福田 真子<sup>3</sup>

## 要約

幼小連携では教育課程の相互理解や学びの内容、指導方法の共有のみならず、授業実践や教材にも着目する必要がある。幼児教育の領域「表現」として行われている活動と図画工作科の教材は関連している点が多くある。本研究では教材を通して幼小連携について教育の場の実装できる観点を創出すべく、園児を対象に教材を開発し、実践を実施した。また、実践を行う際にビデオ撮影と関与観察を行い、実践を終えた後に園児の作品分析を行った。作品分析では園児が製作した作品を、用いられている形や色、表現方法の工夫の観点から考察を行った。2つの実践を考察した結果、幼小連携を踏まえた工作の実践を行う際に、仕組みをきっかけに「遊び」が生まれるようにすること、ねらいを踏まえた上で活動や素材から発展される可能性を考慮することの2つの観点が重要であることを明らかにした。

キーワード: 幼小連携, 表現, 図画工作科, 教材

## 1. 本研究の目的及び問題の所在

## 1.1. 研究の背景

2010年に、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議より「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」の報告がまとめられた。2010年以前の幼小連携に関する研究では小1プロブレムなど学校への適応に着目した傾向がみられたが、この報告では幼児教育と初等教育の接続の構造を「教育の目的・目標」、「教育課程」、「教育活動」の3点から捉え、学びの連続性を踏まえた接続期の重要性に焦点が当てられた。

しかし、幼児教育の特色である子どもの遊びを学習の基礎へと結びつけて活動を実施していく点は、各教科のねらいから資質・能力の育成に取り組む初等教育とは違いがある。さらに評価においても幼児教育と初等教育では違いがある。図画工作科を例に挙げると村田・竹本(2015)は幼小連携を考えた場合に、幼児教育と初等教育それぞれの評価の内容や方法の理解を促進することが必要だと述べた。また、村田らは小学校の図画工作科では学習指導案の段階で評価基準を設定した上で藤本(2009, pp.108-121)による評価事例を参照し、「観察

(見取り)による評価」、「言語(児童の発言、発表、学習カードや感想文など)による評価」、「記録した映像による評価」、「作品などによる評価(アイディアスケッチや途中の作品の記録も含む)」、「自己評価と相互評価」を挙げ、児童の学習状況に応じた評価を示している。一方、幼児教育では各幼稚園の目標に基づき、クラス目標や長期から短期の目標を設定し、実践が行われている。文部科学省(2018, p.115)は『幼稚園教育要領解説』において、評価について「幼児理解に基づいた評価を行う際には、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意する必要がある。」と示し、目標に準拠した初等教育での評価とは方法の点で異なっている。もちろん、評価を行う目的は両者同一の考え方をもち、評価の過程を経て指導の在り方を見直すことや教育内容の改善は両者にも共通な要素である。しかし、教育活動の観点から捉えた際に、幼小連携を実施していく場合には憚る要因が多数あるといえるだろう。

## 1.2. 問題の所在

文部科学省(2010)が示す幼児期の教育と小学校教育それぞれの特徴として「教育のねらい・目標」、「教育

<sup>1</sup> 中部学院大学短期大学部<sup>2</sup> 東京学芸大学 教育学研究科(教職大学院)<sup>3</sup> 東京学芸大学 教育学研究科(教職大学院)

課程」,「教育の方法等」の3点がある(表1)。教育課程では小学校の教科カリキュラムと比較し, 幼児期の教育では経験カリキュラムとなっている。しかし, 丁子(2012)によると図画工作科では材料や道具の使用に関して, 幼児教育と同様に経験カリキュラムの視点を持っていることが指摘されている。図画工作科は経験カリキュラムを引き継ぎながら, 教科カリキュラムの視点を持つようになり, 幼児教育の「豊かな感性をもつ」,「表現して楽しむ」,「表現を楽しむ」に加え, 学習指導要領における教科の資質・能力を育てることが目標になるという。また他にも美術教育の分野では池田他(2019)が図画工作科における造形遊びと幼児教育の共通性を踏まえた上で幼稚園にて造形遊びを実施し, 活動における幼児の学びを明らかにした。教育方法やねらい・目標の違いはあるが, その一方で図画工作科は材料や用具を扱い, 活動の経験から学びを捉えていく視点は幼児教育の実践と類似する点もあるといえよう。

その他に, 生活科に着目した研究がある。安藤(2020)は小学校1年生担任の教師の意識に着目し, 幼児教育と初等教育の学びの連続性について考察した。安藤は生活科の学習指導場面から, 教師の意識には子どもの見取りと支援, 及び保育者との連携について新たな志向が生じていたことを明らかにした。また, 研究の中で安藤は幼児期に個々の子どもが身につけた内容や程度について違いがあると述べ, 小学校の教師が子どもの学びをつなげていくためにも教育課程の編成や幼児期の終わりまでに育てほしい姿の理解に留まらず, 教科などの学習に生かす授業実践を行っていく必要があると述べた。

幼小連携には教育課程の相互理解や学びの内容, 指導方法の共有のみならず, 授業実践単位での見取りも必要である。加えて, 安藤は生活科における教師の意識に着目したが, 授業実践に焦点を当てたならば教材にも着目する必要があるといえよう。図画工作科の教材では保育所, 幼稚園, 認定こども園にて実施されている活動は類似している。こうした観点からも教材を通した幼小連携について教育の場の実装できる視点が必要である。

表1 幼児期の教育と小学校教育それぞれの特徴

	幼稚園	小学校
教育のねらい・目標	方向目標 ('～味わう」「感じる」等の方向づけを重視)	到達目標 ('～できるようにする」といった目標への到達度を重視)
教育課程	経験カリキュラム(一人一人の生活や経験を重視)	教科カリキュラム(学問の体系を重視)
教育の方法等	個人, 友達, 小集団「遊び」を通じた総合的な指導 教師が環境を通じて幼児の活動を方向づける	学級・学年 教科等の目標・内容に沿って選択された教材によって教育が展開

### 1.3. 本研究の目的

以上のように図画工作科では幼児教育の領域「表現」として行われている活動と関連している点も多くある。しかし, 前述したように幼児教育と初等教育は教育のねらい・目標, 教育課程, 教育の方法などの違いから特に教育活動について連携を前提とした教材の研究は少ない。国立教育政策研究所(2017)によると幼小連携の実践として幼稚園や保育所において, 図画工作科や音楽科の専科教員が授業を行っている事例がある。さらに小学校では生活科を中心に, 学校探検や遊びを取り入れることによって学校に慣れることを目的としたスタートカリキュラムを実施している。このように学校へ適応するという観点から教育内容が構成されている。

本研究の目的は初等教育と幼児教育の活動内容について教材から幼小連携に必要な観点を明らかにすることである。本稿では幼児期の活動ならびに図画工作科でも行われている工作に着目し, 教材開発を行い, 幼児を対象に実践を行った。

## 2. 研究方法及び分析について

### 2.1. 教科書分析

日本文教出版及び開隆堂出版の1・2年生を対象とした工作教材をまとめた(表2)<sup>1)</sup>。教材を概観すると, 工作では全ての教材で紙素材が用いられている。また, 幼児教育での実践事例と比較すると教材の中には「まどからこんにちは」や「パタパタストロー」など幼児教育では用いない道具を使う場合や仕掛けに関しての難易度が高い活動もある。しかし, 一方で道具や素材は幼児教育においても身近に用いられているものが多くある。以上から, 幼児教育での工作教材を考案する場合に必要な点は次の2点である。まず, 紙素材を中心に身近材や園児にとって身近な材料を用いることである。次に, 工作教材における「仕組み」を活用し, 仕組みから表現の展開が広がるようにすることである。上記の2点を踏まえ, 教材を2つ開発した。

### 2.2. 研究方法

本研究ではA保育所の年長クラスと年中クラスの合同クラスの園児を対象に2回実践を実施した。また, 実践を行う際にビデオ撮影と関与観察を行い, 実践を終えた後に園児の作品分析を行った。作品分析ではそれぞれ各クラスの園児が製作した作品を, 用いられている形や色, 表現方法の工夫の観点から考察を行った。

### 2.3. 記録と倫理的配慮

園には写真撮影を事前に研究協力依頼に基づき, 説

明を行った。また、論文発表やプライバシー保護に関して同意を得て活動を行った。実践者と補助者は関与観察をしながらデジタルカメラで園児の製作の様子と作品を記録した。

表2 図画工作科教科書における工作教材

出版社の分類	上巻	下巻
・飾るもの・使えるものをつくる(日本文教出版) ・飾るものをつくる工作題材(開隆堂出版)	・ちよきちよき かざり(日) ・ひらひら ゆれて(日) ・かざって なに いれよう(日) ・チョッキン パツでかざろう(開) ・うきうきボックス(開) ・ひかりのくにのなかまたち(開)	・わっかで へんしん(日) ・くつつきマスコット(開) ・のりのりおはながみで(開) ・めざせ!カッターナイフ名人(開) ・まどのあるたても(開) ・かぶってへんしん(開)
・遊ぶもの・仕組みから思い付いたものをつくる(日本文教出版) ・遊ぶものをつくる工作題材(開隆堂出版)	・おって たてたら(日) ・かみぎら コロコロ(日) ・によきにょき とびだせ(日) ・ふわふわゴー(開) ・あそぼうよ、パクパクさん(開)	・まどから こんにちは(日) ・音づくり フレンジ(日) ・わくわく おはなしゲーム(日) ・パタパタ ストロロー(日) ・みんなでワイワイ!紙けん玉(開)
・紙や、紙でできた身近なものを主材料にしたページ(開隆堂出版)	ひらめきコーナー	ひらめきコーナー

### 3. 教材の実践について

#### 3.1. 紙コップで人形作り!

##### 3.1.1. 実践の概要・ねらい

実践の概要は次のとおりである。対象の園児は18名である。9名が年中クラス、9名が年長クラスである。

教材名：紙コップで人形作り!

日時：2023年8月10日(木) 10:00~11:00

場所：A保育所保育室

実践者：小室明久

補助：小島菜緒子他1名(記録・分析)

材料：紙コップ、色画用紙、動眼

道具：はさみ、木工用接着剤

本実践のねらいは教科書分析より示した2点を踏まえ、園児にとって身近な材料である紙コップの対称的な側面に切り込みを入れ、外側に向かって折り曲げることで底の部分がくの字となり、手でパクパクと動かせるパペット人形のような「仕組み」から遊びや表現を展開する

ことである。

本実践では園児が紙コップと画用紙を使った表現方法に着目し、作品のテーマやそれぞれの作品にどのような表現が現れているかを関与観察と記録動画から得られた園児たちの様子を基に分析した。

#### 3.1.2. 実践の展開

本実践では、最初に導入を行った。まず、紙コップ人形について、あらかじめ用意した人形を使い紹介を行った(図1)。人形の紹介では実際に存在している生き物から空想上の生き物まで園児たちが製作したい作品にできることを伝えた。人形について話を終えた後に、紙コップを開閉する仕組みについて説明した。説明後、園児たちに紙コップを配布し、「パクパク人形」として遊ぶことができる状態にまで進めた。

人形の準備ができた後は、画用紙をはさみで切る貼り方や手でちぎる方法を伝えた。方法について話した後は頭に貼ることや手としても活用できるというように色画用紙の様々な用い方についても説明を行った。材料の説明を終えた後に、木工用接着剤とはさみの諸注意を行い、製作活動へと移った(図2)。

製作活動を終えた後は机を移動し、鑑賞活動へと入った。鑑賞活動では作った人形の名前と人形の紹介を園児が行った(図3)。

図1 人形を用いて説明をする



図2 色画用紙を貼りつけ、人形を製作する



図3 人形を使いながら作品を紹介する鑑賞活動



### 3.1.3. 実践の考察

実践後、作品における園児の表現の種類をまとめた(表3)。さらに、作品のテーマやそれぞれの作品にどのような表現が現れているかを分析し、まとめた(表4)。これらの表に加え、関与観察と記録動画から得られた園児たちの様子を基に本実践を考察していく。

活動の導入では参考作品を示し、実践者は「皆でお友達を作ってあげよう」と伝えた。導入後に園児たちに問いかけた際には、「ネコさん」、「ウサギさん」といった動物や生き物を挙げていた。作品のテーマとしてはネコ、ウサギ、カエルなどの生き物を作った園児が13名であった。人を模したものや怪獣、ゲームのキャラクター、電車など5名の園児はそれらとは異なるテーマで作品を作っていた。今回の実践の「仕組み」である、折り曲げた紙コップの底の部分に装飾を加えた園児は18名中、11名であった。具体的には、「ベロ」を作った園児が6名、口を表現するために赤色の画用紙を貼りつけた園児が2名、胴体の装飾としてパッケン部分に画用紙を貼りつけている園児が3名であった。「仕組み」部分に何も装飾を加えなかった園児は7名であった。このことから「仕組み」を意識して表現した園児がいる一方で、特に表現と「仕組み」を結びつけずに活動した園児もいることがわかった。

活動開始直後に一人の園児は緑色の画用紙を見つけ、実践者にカエルを作りたいと話した。画用紙を紙コップのような半円柱型の側面に沿わせて貼りつけ、形に合わせて周りを切り取ることが難しく、当初はなかなか形にならなかった。しかし画用紙を紙コップ全体に貼りつけようと保育者と共に取り組み、完成させることができた。この園児は作品が完成する前段階から紙コップをびよんびよんと手で動かしていた。画用紙を使った表現が形になる以前からカエルがどんなふう跳ぶのか、紙コップを動かし遊んでいた。

教科書教材である「あそぼうよ、パクパクさん」(開隆堂出版, 2020a) は本実践と教材の内容、ねらい共に共通している。また「みんなで ワイワイ! 紙けん玉」(開隆堂出版, 2020b) も仕組みを活かして製

作り、作品で遊ぶことをめあてとしている教材の1つである。同じ小学校低学年の教材である両者の違いは、「仕組み」の作成に対する違いである。「あそぼうよ、パクパクさん」では「仕組み」の動きや特徴を捉えることが目標として示されている一方、「仕組み」が生まれる過程や方法はどの作品においても同じである。対して「みんなで ワイワイ! 紙けん玉」では「面白い構造やたのしい遊び方を考えたりする」と示され、子どもが「仕組み」自体を考え、表すということがねらいにある。作品を製作する前からカエルがどんなふう跳ぶのか想像し遊んでいた園児のように、園児たちの活動において仕組みという土台を基に活動を始め、仕組みに沿った製作を進めていくことも重要だが、「仕組み」をきっかけとして遊びや表現が生まれていくことも重要である。また作品表現の種類からは表4に示したような表現方法がみられ、「あそぼうよ、パクパクさん」(開隆堂出版, 2020c) における色画用紙やクレヨンなどの身近な材料を効果的に使うという要素と共通しているといえる。

表3 園児の作品にみられた紙表現の種類

「仕組み」を意識して作っている (ベロや口の表現)
紙コップを切り抜いて形を変えている
複数の色画用紙を使っている
パーツを紙コップからあえてはみ出させるようにして貼っている
同じ色の画用紙を重ねて貼ったり、ツギハギになるようにして貼っている
異なる色の画用紙を重ねて表現している
はさみで切って表現している
手でちぎって表現している
紙コップ全体を覆うようにして一枚の色画用紙を貼っている
小さくて複雑な細かいパーツを作っている
四角や三角などの比較的シンプルなパーツを組み合わせで作っている
パッケンにリボンやボタンなどの装飾を工夫してくっつけている
顔のディテールやパーツの装飾に鉛筆を使っている
パーツを切り抜く前に、鉛筆で下描きをしている

表4 作品における園児の表現の種類

1. 年中	2. 年中	3. 年中	4. 年中	5. 年中	6. 年中	7. 年中	8. 年中	1. 年長
耳、口、身体はピンク色。頭のリボンや体に付いたボタンは赤い画用紙で作られている。画用紙は全てはさみによって形を切り取られていて、リボンとボタンは、先に赤い画用紙に鉛筆で模様や形を描き込み、その後その形に沿って切り取られ貼り付けられている。胴体の部分には同じピンク色の小さく切り取られた形がいくつか重なっており、手と足が表現されている。	頭と身体それぞれ一面に茶色い画用紙が貼られている。頭には黄色い画用紙に鉛筆でリボンを描きはさみで切り取ったものが貼り付けられている。身体には大きなボタンと小さなボタンがそれぞれ一つずつ付けられている。はじめに水色の画用紙を貼った後にさらに黄色い画用紙を重ねての一回り小さな画用紙を重ねている。大きなボタンの中央には小さな丸が鉛筆で描かれ、小さなボタンには画用紙を切り取る前に鉛筆で描き込んだ線が見える。	頭部には人の顔を模したものの、胴体にはピンク色の画用紙が大きく貼られている。身体には片方の辺ははさみで切れ、2辺は手でちぎって形作られている。薄橙色の画用紙をちぎって作られた顔に、黒い画用紙を重ねて貼られている。鼻の部分は細長く切った画用紙を短くちぎったパーツで表現されている。	ピンク、赤、水色、黄色とカラフルなウサギを作った。身体は黄色色だが一枚の大きな画用紙を貼りつけるのでなく、ちぎったりはさみで切ったりして細かくした画用紙を再度つなぎ合わせていくようにして表現している。頭のリボンは中央は黄色、両サイドは赤と、異なる色画用紙のパーツを組み合わせて貼っている。口は四角い画用紙は部分の手にちぎって表現されている。	紙コップの上部に顔、下部に身体を作った他の園児と異なり、紙コップの下部に集中した装飾をした。ピンクと赤色の画用紙を選択して作った。ウサギの耳の間に目玉シールを木工用接着剤で貼り付けている。はさみを使ってそれぞれのパーツを作り、口のパーツの下に貼りつけられている。口の下にははさみでちぎったパーツを貼りつけている。	頭にリボンを付けたネコを作った。黄色、黒色、赤色、ピンク色、水色と様々な色の画用紙を使っている。リボンはピンク色の画用紙の上に水色の小さなパーツを貼りつけている。どのパーツも小さかったり細長かったりと比較的作るのが難しいが、はさみを使って細かく切り取られている。ヒゲの下には手のようなパーツが貼りつけられており、画用紙を切りとる前に鉛筆で線を引いた模様が伺える。	緑色とピンク色の画用紙でカエルを作った。紙コップ全体を緑色の画用紙で覆うようにして作った。切り取られた形は大きくシンプルであるが、紙コップの曲線に沿って上手に画用紙を貼りつけた。目玉シールのついた上部分は紙コップ全体に画用紙を貼りつけているが、下部分では細めに切った画用紙を貼りつけている。中央のバックン部分から勢いよくペロが飛び出しており、はつらつとしたカエルが表現されている。	黄色、赤色、水色の画用紙を使ってネコを作った。それぞれのパーツは、はさみならではのすっきりとした直線がよく現れている。耳やヒゲ、手は紙コップから勢いよく飛び出た耳にはウサギの長い耳とそ曲線が現れている。左耳には黄色と水色の画用紙を貼りあわせて作ったりリボンを乗せた。鼻やほっぺたなどの細かなパーツには鉛筆で線を引いた跡がみられる。	4色の画用紙でウサギを作った。バックン部分には全体に赤色の画用紙を貼り口を表現している。ウサギのパーツははさみによって細かく切り抜かれている。勢いよく飛び出た耳にはウサギの長い耳とそ曲線が現れている。左耳には黄色と水色の画用紙を貼りあわせて作ったりリボンを乗せた。鼻やほっぺたなどの細かなパーツには鉛筆で線を引いた跡がみられる。
2. 年長	3. 年長	4. 年長	5. 年長	6. 年長	7. 年長	8. 年長	9. 年長	10. 年長
ピンク色の画用紙で耳を作りウサギを表現した。耳と顔の画用紙に細長いラインと星のマークを描いた。その後線の枠に沿ってはさみで切り取っている。中央のバックン部分に赤い画用紙を使って貼りつけられた口や胴体に付けられたボタンも全て、画用紙に鉛筆で描いた形に合わせて切り抜いている。星の形や、口やボタンのパーツは小さいが、曲線や直線に沿うようにしてパーツを作った。	ピンク色の画用紙を貼り合わせてウサギを作った。胴体の部分には紙コップの曲線と線に沿って丁寧に画用紙が貼りつけられている。顔部分では一枚の紙ではなく、後から隙間を埋めるように張り足していったことがわかる。口は鉛筆で描かれている。紙コップの縁からはみ出ている耳はとも小さい。画用紙に耳の形とその中にハートマークを描きはさみで切り抜いた。	沢山の黄色い画用紙を使ってピカチュウを作った。上半分の紙コップの縁は切り取られ、紙コップ全体がその上に耳や手などの細長く切ったパーツを重ねた。真ん中にピンク色の画用紙で作ったハートがある。口のくぼんだ所で丁寧に切り抜いている。画用紙に下書きをしてリボンと口を作り頭部を装飾している。	茶色い画用紙を紙コップ全体に貼ってネコを作った。顔と胴体にははさみで大きく切り抜いたパーツを付けている。その上に耳や手などの細長く切ったパーツを後から合成するようにして作った。紙コップの下半分には画用紙を沢山切り抜いて出来たパーツが何枚も貼り重ねられている。バックン部分からは四角く切り取られたペロが飛び出している。電車を描いた画用紙を顔の中央に貼りつけた。	赤い画用紙を使って電車を作った。耳やリボン等の具体的なパーツを決めてから作るのではなく、画用紙をはさみで切り取って後から合成するようにして作った。紙コップの下半分には画用紙を沢山切り抜いて出来たパーツが何枚も貼り重ねられている。バックン部分からは四角く切り取られたペロが飛び出している。電車を描いた画用紙を顔の中央に貼りつけた。	茶色のぶちのあるネコを作った。紙コップの上部分はネコの耳の形に沿って切り取られていて、その上に鉛筆で下書きをしてから作った黒い画用紙、さらにピンク色の三角形の画用紙を貼りつけてネコの耳を表現している。目玉シールは左右対称な位置に付けられている。鼻と口は鉛筆で描いた。バックン部分全体には茶色い画用紙を貼りつけた。大きな異なる4つの紙をラダムに貼り、ネコの模様を表現した。	赤色の画用紙でペロが勢いよく飛び出たベエを作った。はさみを使って画用紙から沢山の切り抜きを作った。ひとつひとつのパーツは、はさみならではのすっきりとした線が出ていて、それぞれの形は三角形や四角形などシンプルである。それらを胴体では重ねて隙間を埋めるように張り合わせて表現した。顔には鼻や耳を作った。	バックン部分から長い水色のペロが飛び出ている怪獣を作った。頭にはグレーの画用紙で4つの三角形のパーツが様々な角度で貼りつけられている。トゲトゲとした部分が紙コップからはみ出しており、怪獣らしいシルエットを表現した。鼻、口、紙コップの下部に貼られたパーツは全て緑色ではさみで切り抜かれている。胴体には3枚の紙が所々紙コップからはみ出るようにして貼られている。	頭の中央から伸びた耳が特徴的なウサギを作った。耳の部分は、茶色い画用紙の上にピンク色の画用紙を貼りつけた。左耳はカーンした部分の紙コップの縁は、はさみで半円のように切り取られている。鼻は黄色い三角形の紙で作られ、口とヒゲは鉛筆で描いた。お腹には茶色い画用紙、手足の部分には折り曲げた水色の画用紙の先端で貼りつけて飛び出すようにしている。ピンク色の画用紙を使って小さなハートを2つ付けた。

3.2. 入れてふって!レッツ音づくり

3.2.1. 実践の概要・ねらい

実践の概要は次のとおりである。対象の園児は20名である。10名が年中クラス、10名が年長クラスである。前回の実践の際に欠席だった2名が加わり、計20名が参加した。

教材名：入れてふって!レッツ音づくり

日時：2023年8月22日(火) 16:00~17:00

場所：A保育所保育室

実践者：福田真子

補助：小室明久(記録・分析)、小島菜緒子(記録・分析)

材料：ペットボトル、ストロー、マカロニ、大豆、ビー玉、デコレーションボール、花紙、ビニールテープ、マスキングテープ、丸型シール、動眼シール

道具：はさみ

本実践では園児の能動的かつ多様な行為から「仕組

み」の理解に繋がる活動が生まれることに着目した。本実践における「仕組み」とは、ボトルに入れる素材の種類や量、鳴らし方によって音色や音量が変わることである。本実践のねらいは「楽しみながら音づくりをする」であり、その中で園児たちがどのように「仕組み」の理解に関わるかという観点をもちながら実践と関与観察を行った。

### 3.2.2. 実践の展開

本実践は、ペットボトル容器に様々な素材を入れ、振る、回すといった動作で鳴らす音の違いを楽しみながら音づくりを行い、装飾して作品に仕上げるという内容である。1時間の中では、音づくりと装飾の活動を段階的に説明して進行した。導入では短く切ったストローやマカロニなどの食材、ビー玉などの素材を園児たちに見せ、ペットボトルに入れて鳴らしてみたいものを一人ずつ手に取りながら選んでもらった(図4)。次に、素材をペットボトルに入れ、音を鳴らしてもらった(図5)。動作や力の強弱、素材の種類や量によって、音の大きさや音色が変わることを伝え、園児たちは自分のお気に入りの音づくりを試行錯誤した。

音づくりの後は装飾を行った。中に入れる花紙や、蓋を留めるビニールテープ、シールとマスキングテープを提示した。目玉シールを使いキャラクターのようにする例と、テープやシールの模様でマラカスのようにする例を紹介した後で、自由に装飾してもらった(図6)。

図4 ペットボトルに入れる素材を選ぶ



図5 素材を入れて音づくりをする



図6 シールやテープで装飾する



### 3.2.3. 実践の考察

本実践「入れてふって!レッツ音づくり」では園児がペットボトルと多様な素材を使ってどのような音をつくり作品を完成させるかを捉えた。実践後に作品分析を行った記述をまとめた(表5)。さらに作品分析からみられた表現の種類を整理したものを作成した(表6)。そして、関与観察や記録動画から得られた、園児たちにみられた動作の種類についてまとめた(表7)。これらを基に、本実践を以下の視点から考察していく。

園児たちは音づくりにおいて、特に動作や素材自体に着目して活動に取り組んでおり、素材を入れる行為や、振る、回すといった音の鳴らし方を試していた。本実践では表7のように多様な動作の種類がみられたが、特に音づくりにおける音を鳴らす段階で最も多くの種類がみられた。始めは多くの園児がマラカスを振るように鳴らしていた。しかしその後、ボトルを振る方向、回数、力の強弱、ボトルを持つ位置や向き、片手と両手での持ち比べ、転がす、叩くなどの鳴らし方を試していた。これらの動作では「仕組み」を試行錯誤するために意図的に行う園児もいれば、周囲の園児の鳴らし方を見て、同じ振り方を試す園児やお気に入りの鳴らし方を見つけ繰り返す園児もいた。また、園児が五感を使って素材に関わっていた様子もみられた。聴覚では音づくりの際に「音を自分で聞きながら鳴らし他者にも聞かせる」園児や「トンカチを打つように力強く一回だけ振る」こととなるべく大きな音を出そうとする園児がいた。

表5 作品における園児の表現の種類

1. 年中	2. 年中	3. 年中	4. 年中	5. 年中	6. 年中	7. 年中
						
ストローや大豆、デコレーションボール、花紙がボトルいっぱいに入っている。ストローやお花紙は3色ずつ選んだ。キャップの部分には赤いビニールテープを巻いた。大小異なる丸型シールと目玉シールを貼りつけて飾った。飾りの隙間から中の様子が見えている。	ストロー、マカロニ、大豆、紫色とピンク色の花紙を入れている。キャップ部分には黄色のビニールテープを選んだ。目玉の下には黄色の丸型シールを貼り付けた。目玉の下には赤色の丸型シールを3枚貼った。カラクターの顔に見えるよう飾りつけている。	ストローとデコレーションボール、ピンクと緑色の花紙が入っている。キャップには黄色のビニールテープを選んだ。周りには大きな赤色の丸型シールと目玉シールを貼り、紫色のマスキングテープを巻きつけた。中身がよく見えるような装飾となっている。	ストローとデコレーションボールをメインに、紫色の花紙が入っている。キャップには黄色のビニールテープを巻き、側面は顔に見えるよう飾りつけている。上部には小さい丸型シールを隙間を空けて飾りつけている。下部には大きい丸型シールを隙間を空けて飾りつけている。	ビー玉、ストロー、マカロニ、ピンク色の花紙を入れている。キャップには黄色のビニールテープを選んだ。飾りつけは中身がよく見えるようなシンプルなものとなっている。側面に等間隔で何色もの丸型シールを貼り、下部に紫色のマスキングテープを巻きつけている。	マカロニなどの少量のパーツに、ピンク色と緑色の花紙を入れている。キャップには黄色のビニールテープを選んだ。側面には丸型シールとマスキングテープを交互に貼りつけている。上部には小さい丸型シールを、その下に金色のテープを挟み、さらに下に大きい丸型シールを貼っている。中身も見えるように、模様のようにパーツを等間隔に飾りつけている。	ビー玉、ストロー、マカロニにピンク色と緑色の花紙を入れている。キャップには黄色のビニールテープを巻き、側面にも黄色の丸型シールを貼りつけた。その他には目玉シールを斜めに貼りつけたのみで、中身がよく見えるような装飾となっている。
						
8. 年中	9. 年中	10. 年中	1. 年長	2. 年長	3. 年長	4. 年長
ビー玉、ストロー、デコレーションボールをメインに、紫色の花紙を入れた中身となっている。キャップには赤色のビニールテープを巻き、側面には様々な色や大きさの丸型シールをたくさん貼りつけた。灰色と黒色が多く、その間に緑色、黄色、赤色、青色のシールがアクセントのように貼られている。わずかな隙間から中身が見え始めるよう飾りつけとなっている。	何度か中身を吟味した結果、ストローやマカロニ、花紙を選んだ。キャップには赤色のビニールテープを巻き、側面には下部に緑色のマスキングテープ、青いシールの下に目玉シールを貼る飾りつけにした。中身も装飾もシンプルにまとめている。	ストロー、デコレーションボール、マカロニと紫色の花紙を入れている。キャップには赤色のビニールテープを選んだ。側面には大小異なる何色もの丸型シールを水玉模様のように貼りつけた。目の部分はペットボトル上部に赤色と青色のシールを斜めに貼り、その下に目玉シールを貼りつけている。	初めは少なめにストローとデコレーションボールを選び、ピンクと水色と紫色の3色の花紙を入れた。キャップには赤色のビニールテープを選び、キャップの白い部分が見えるように巻きつけた。周りには飾りつけをせず、中身の素材がよく見えるような作品に仕上げている。	デコレーションボール、ストロー、マカロニ、白色と黄色の花紙を入れている。キャップには黒色のビニールテープを選んだ。キャップとボトル上部に黒色の丸型シールを貼り、側面には目玉シールを付けている。目玉の下に金色のマスキングテープを幅広く巻きつけ、その下に銀色のテープを巻いている。	たくさんのデコレーションボールとピンク色の花紙を入れている。キャップには赤色のビニールテープを選んだ。上部にピンク色の丸型シールを放射状に並べて貼り、側面には目玉シールと紫色の丸型シールを顔のパーツに見えるよう飾りつけている。底の部分には紫色のマスキングテープを巻きつけ、中身がよく見えるような作品に仕上げている。	ストロー、デコレーションボールなどの素材に、ピンク色と青色の花紙を入れている。キャップには赤色のビニールテープを巻き、側面には大小カラフルな丸型シールを散りばめながら貼っている。目玉シールも貼り、下部には緑色のマスキングテープを曲線的に巻きつけている。
						
5. 年長	6. 年長	7. 年長	8. 年長	9. 年長	10. 年長	
花紙やビー玉、ストローなど様々な素材をボトルいっぱいに入れている。キャップには黒色のビニールテープを選んだ。側面下部に灰色と黒色の丸型シールを交互に貼り、その下に5色のマスキングテープで覆うように飾りつけている。	ビー玉とデコレーションボールに、青色の花紙を入れたシンプルの中身となっている。キャップには赤色のビニールテープを巻き、側面には目玉シールの下に黒色のシールを2枚貼った。その周りに大小様々な色の丸型シールを、重ねたり隙間を開けたりしながら貼りつけている。	ストロー、デコレーションボール、マカロニ、水色と白色の花紙を入れている。キャップには黄色のビニールテープを巻き、側面には顔に見えるよう飾りつけている。ペットボトル上部に紫色のマスキングテープを冠のように切って巻きつけ、目玉の下に白色の丸型シール、その下に青色のマスキングテープを斜めに、その間に赤色の丸型シールを3枚貼っている。	皆が順番に花紙の色を選んでボトルに入れる中、あえて音がよく聞こえるようにお花紙を入れないと決めた。キャップのテープは緑色、中のストロー、ビー玉、デコレーションボールは青色や水色に統一されている。外側には目玉シールと青い大きめの丸型シール、緑色のマスキングテープが貼られている。	ストロー、デコレーションボール、大豆、白色と紫色の花紙を入れている。キャップには赤色のビニールテープを上部に巻きつけた。側面は飾りつけず、下部に顔のパーツに見えるように巻きつけた。目玉シールと目玉シールを貼りつけている。また底の側面に金色のマスキングテープを巻きつけ、その上から黄色とピンク色の小さい丸型シールを重めている。	ビー玉、ストロー、デコレーションボール、マカロニなどの素材に、水色、ピンク色、白色の花紙を入れている。キャップには赤色のビニールテープを巻き、側面は中央より下部に、目玉シールと2色のマスキングテープを半周ほどの長さで貼りつけた。中身がよく見えるような装飾となっている。	

触覚では、多くの園児が、ガラス材のビー玉、らせん状のマカロニ、つるつるのストローなどをボトルに入れる前に「素材の凹凸や質感（マチエール）を確かめながら触る」ように素材と関わっていた。視覚では、素材の動きをじっくり目で追いながらボトルを振っていた園児がみられた。こうした動作や素材との関わり方についての種類は、実践者がバリエーションを提示したのではなく、園児たちの行為から発生したものであった。

そして「仕組み」の理解に関して、16名の園児から「仕組み」に気づいたと推察される表現がみられた。例えば「中身の種類や量を絞ったり増やしたりしている」表現をした園児は、音づくりの際に中身の素材を全て取り出し1種類に絞って入れ直し、その後また増やしていた。また多くの園児が追加の素材を取りに行く中、迷った様子を見せた後に「追加ではいけない」と決めていた園児や、「やっぱり戻す」と材料置き場に素材を減らしに来た園児もいた。先述した多様な鳴らし方を踏まえ、お気に入りの音をつくるために素材の量や種類を自分で取捨選択する園児の姿がみられた。

また作品分析から、本実践で園児が材料の形や色に着目して製作していたことも推察できた。例えば「中身や飾りの色に統一感をもたせている」表現をする園児や「蓋を留めるビニールテープの色とシールの色を同じにしている」園児がみられた。また作品全体の傾向を振り返ると、ペットボトルの中が見えるよう隙間や空間を残して飾りつける表現が20作品中18作品みられた。これは園児が素材に対し「音を鳴らす材料」に加え「視覚的な効果をもたらす材料」としての要素を見出し、製作に反映させていたためではないかと考えられる。本実践の主なねらいは音づくりであったが、園児たちは素材の形や色にも着目する要素を見出し製作につなげていたと考えられる。

表6 園児の作品にみられた表現の種類

ボトルいっぱいに素材を入れている
中身の種類や量を絞ったり増やしたりしている
目玉シールを貼り顔に見えるよう飾りつけている
ボトルの中身が見えるように空間を残しながら飾りつけている
ボトルを覆うように飾りつけている
ボトルの側面に飾りつけをしない
異なる色の花紙を入れている
シールやテープを組み合わせて模様のように飾りつけている
シールやテープを組み合わせて顔の形に飾りつけている
色や大きさの異なるシールを組み合わせて貼っている
シールやテープを重ねながら貼っている
ビニールテープの色とシールの色を同じにしている
前面にあたる部分にのみ飾りつけている
全面に飾りつけている
目玉やシールを飾りつける位置を工夫している
中身や飾りの色に統一感をもたせている

表7 園児にみられた動作の種類

素材の凹凸や質感（マチエール）を確かめながら触る
ボトルの穴に注ぐように入れたり、ぼんぼんと押し入れたりする
キャップをくるくる開け閉めする
ボトルの持ち手を握って上下左右に振る
キャップ部分を持って上下左右や円状に振る
音を自分で聞きながら鳴らし他者にも聞かせる
ボトルの底部を両手で握り小刻みに揺する
両手で横向きに掴み上下左右に振る
交互に逆手にしながら振る
トンカチを打つように力強く一回だけ振る
キャップを叩いた振動で鳴らす
ボトルを逆さまにして中身を取り出す
ボトルの底面に口や顎をつける
机の上でボトルをコロコロと転がす
ボトルの上にトレイをかぶせる
トレイの中にボトルを入れかき混ぜるように回す
逆さまのトレイの上にボトルを置く
テープを巻きつける
シールを台紙からはがしボトルに貼りつける

最後に幼小連携の観点から本実践を考察する。文部科学省による幼稚園教育要領解説（2018, p.67）では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の（10）豊かな感性と表現において「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり（後略）」と記載されている。本実践における園児の「仕組み」の理解は、豊かな感性と表現の育成につながっていたものだと考えられる。

また本実践は日本文教出版による小学校図画工作科の教科書教材である「音づくりフレンズ」（日本文教出版、2020）と目標や学習内容において共通点がある。「音づくりフレンズ」も音が鳴る材料や「仕組み」を用いた教材であり、空き箱や缶、割り箸や輪ゴムといったより多様な身近材を使って製作する内容である。「題材別カリキュラム・評価規準例」（日本文教出版、2018）によると「音づくりフレンズ」の目標は「身近な材料で音を出す仕組みをつくり、いろいろな形や色、触った感じなどを捉えながら、音からイメージした飾りを工夫し、鳴らして楽しむ。」であり、主な学習内容は「いろいろな材料を使って、どのような音が鳴るのか試す。」「楽しいと感じた音や材料を使って、音の鳴る仕組みをつくる。」「音の感じに合わせて飾る。」「音楽に合わせてたり、歌ったりしながら音を鳴らして、つくったものの楽しさや面白さを味わう。」とある。この教材と比較すると、本実践は動作や音づくり自体を楽しむことに重きを置きながら、限定的な素材や用具で「仕組み」への気づきにアプローチした活動であると捉えられる。しかし園児からは「仕組み」に捉われず、行為や素材そのものに着目して生まれた姿や作品もみられた。これは本実践における「仕組み」

が、小学校教育における到達目標のようなものではなく、あくまで活動や素材から発展される可能性として緩やかに提示されたものであったためではないだろうか。「遊びの中での学び」と「仕組み」の理解につながる活動が併存した事例として、本実践は今後さらに検討すべきではないだろうか。本実践では製作過程において園児たちから自然発生的な「遊びの中での学び」の要素がみられた。今後、実践の中で「遊び」の時間をとった際にどのような「遊びの中の学び」がみられるのか、園児たちと作品や素材、動作の関わり方に変化はみられるのか、といった観点からも検討していくべきだろう。

#### 4. 統合考察

本研究では2つの実践を行った。それぞれの教材では「仕組み」を活用し、園児が活動に取り組めるように考案し、実施した。2つの実践を考察した結果、幼小連携—表現の領域と図画工作科—を踏まえた工作の実践を行う上で、重要な観点は次のとおりである。

- ・仕組みをきっかけに「遊び」が生まれるようにすること
- ・ねらいを踏まえた上で活動や素材から発展される可能性を考慮すること

小学校においては到達目標や授業のめあてを目指すだけでなく、素材から発展する展開や遊びから広がる活動の展開の可能性にも着目することが重要だといえよう。

幼稚園や保育所においては遊びを試行錯誤の過程として捉え、子どもの表現を形や色の観点からも捉えていく視野の拡張が重要である。

文部科学省による小学校図画工作科の学習指導要領解説(2018, p.38)の中で、低学年の目標及び内容、A表現(1)イには「絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したことから、表したいことを見付けることや、好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること。」とある。幼児教育と初等教育において、素材から活動が展開されるという共通点はあるながらも、小学校では意図や目的を見つけそれに向かって思考しながら製作することが求められるようになる。幼児教育段階における、能動的に素材と触れ合い試行錯誤する経験は、児童が表現における内発的な意図や目的を見付けるきっかけになり得るのではないだろうか。本実践から得られた示唆は、工作だけではなく図画工作科における造形遊び、絵や立体に表す活動の表現領域全体をつなぐ視点としても有効になるのではないだろうか。

本研究の課題としては小学校での実践を行っていないため、幼児教育にて行われている工作教材について実践を踏まえ、初等教育の観点からも考察が必要であるといえよう。

#### 付記

本研究はJSPS科研費22K02673の助成を受けたものです。

#### 謝辞

本研究に関わった園の先生、園の保護者様、園児の皆様にご心より御礼申し上げます。

#### 注

- 1) 表2において日本文教出版は(日)、開隆堂出版は(開)と表記した。

#### 参考文献

- 安藤哲也(2020)「幼小の学びの連続性に着目した小1担任の意識に関する事例的考察—生活科の学習指導場面を窓口にして—」『日本教科教育学会誌』43, 1, 21-30.
- 池田史志・新井馨・遠地千智・掛志徳(2019)「幼稚園における遊びを取り入れた『表現』に関する実践的研究:小学校図画工作科『造形遊び』との共通性を踏まえて」『学校教育実践学研究』25, 31-38.
- 開隆堂出版(2020a)『みつけたよ ずがこうさく 1・2上』開隆堂出版株式会社.
- 開隆堂出版(2020b)『わくわくするね ずがこうさく 1・2下』開隆堂出版株式会社.
- 開隆堂出版(2020c)「年間指導計画と題材ごとの観点別評価規準」  
[https://www.kairyudo.co.jp/contents/01\\_sho/2020/zukou/pdf/shozu\\_nenkei&hyouka.pdf](https://www.kairyudo.co.jp/contents/01_sho/2020/zukou/pdf/shozu_nenkei&hyouka.pdf)
- 国立教育政策研究所(2017)「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究(報告書)」  
[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h28a/syocyu-5-1\\_a.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf)
- 丁子かおる(2012)「保育現場における材料用具の経験についての調査研究:美術教育の幼小接続へ向けて」『美術教育学』33, 287-300.
- 日本文教出版(2018)「令和2年度版 題材別カリキュラム・評価規準例」  
[https://www.nichibung.co.jp/textbooks/zuko/download/r2/r2\\_zuko\\_nenkei\\_hyouka\\_12ge\\_1910.pdf](https://www.nichibung.co.jp/textbooks/zuko/download/r2/r2_zuko_nenkei_hyouka_12ge_1910.pdf)
- 日本文教出版(2020)『ずがこうさく 1・2下 たのしいな おもしろいな』日本文教出版.
- 藤本陽三(2009)「図画工作科の指導計画と評価」大橋功監編『美術教育概論(改訂版)』日本文教出版, 108-121.

村田透・竹本封由之進 (2015) 「『図画工作』分野における  
幼小連携」長瀬美子・田中伸・峯恭子編『幼小連携カリ  
キュラムのデザインと評価』風間書房, 123-154.  
文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)  
解説 図画工作編』日本文教出版.  
文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館.

文部科学省 (幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在  
り方に関する調査研究協力者会議) (2010) 「幼児期の教  
育と小学校教育の接続について (報告)」  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/  
toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf)

## Perspectives on the Connection Between Expression and the Subject of Arts and Crafts When Linking Early Childhood and Elementary School Education: Analyzing Textbooks to Implement Handicraft Teaching Materials

Akihisa KOMURO<sup>1</sup>, Naoko KOJIMA<sup>2</sup>, Mako FUKUDA<sup>3</sup>

<sup>1</sup> Chubu Gakuin College

<sup>2</sup> Graduate School of Teacher Education, Tokyo Gakugei University

<sup>3</sup> Graduate School of Teacher Education, Tokyo Gakugei University

### Abstract

In this study, with the aim of creating perspectives that can be implemented in the educational setting where early childhood and elementary school education are linked, we developed teaching materials targeting preschoolers and conducted practical lessons. In addition, after the completion of the lessons, an analysis of the artworks created by the preschoolers was conducted. The analysis of the artworks included looking into the colors and shapes used, as well as the creativity involved in expressing themselves. From examining the results of the two practical implementations, it became evident that when conducting handicraft practices with a focus on early childhood and elementary school collaboration, it's essential to initiate "play" based on the established structure and to consider the potential evolution from activities and materials based on set objectives.

Keywords : collaboration between early childhood education and school education,  
"expression" at early childhood education, arts and crafts, teaching materials